

豆の町（ビーンタウン）から

こんにちは（第8回）

会員家族 住井 円香

■異なる学問領域にも触れられる機会も、選択肢が多いアメリカの大学の専攻

ボストン大学入学当時、慣れない親元を離れた生活や、異なる背景で育った同級生と打ち解けられるかなどの不安の他に、自分が選んだ経済学という主専攻は、果たして本当に興味のあることなのか、適性に合う分野なのか、という心配をしています。

そして授業を受講しているうちに、適性があるのかはさておき、経済活動の仕組みだけでなく、統計的手法を用いて世の中の動きを分析する学びの機会を通じて、経済学の学びの機会を通じて、経済学を専攻してよかったと感じるようになりまして。ただ、日本の大学で

進化する学生も同じだと思いますが、それまで生きてきた約18年間の経験をともに、受験生が自分の学びたい分野を見極めることはそう容易

なことではありません。

アメリカの大学では、入学後に学びたいことが変わった学生が専攻を変更することは実は珍しくありません。もっと言えば、私のいるボストン大学に限らず、大学自体合わないと感じ、他大学に編入するという学生も多くいます。日本でも、新たに学びたい分野ができたときには、それまで通っていた大学内で転科したり、他の大学を受験し直すこともあるとは聞きました。アメリカの場合はそれが決して珍しいことではないのです。

また、日本との大学の違いでは、アメリカの大学では、2つ以上の主専攻を学ぶ学生や、メーンで学びたい分野の他に副専攻として異なる学問領域に触れることも可能になっている点があります。

私も前期（2年生の秋学期）は、元々専攻していた経済学の他に、音楽を副専攻としていました。以前の回で書いたように、私はバンドの部活動に所属していますが、そこでキーボードやシンセサイザーを演奏する際に、コードなどの知識を体系的に身に付けておいた方が譜読みや、楽譜への理解がスムーズになる

と考えたからでした。

ただ実は、そうした学術的な興味とは別の理由もありました。子どもの時にドラマや映画でも人気となった漫画『のだめカンタービレ』を読んで以来、音楽大学の世界にひそかに憧れてもいたからです。

日本の大学の場合、芸術大学や音楽大学の学生、もしくは教職課程で学ばない限りは、一般教養以外で音楽の授業を取る機会はあまり用意されていないように思います。アメリカの場合はこうした音楽や芸術であっても、私の経済学のように一見かけ離れた領域を学ぶ学生が、もう一つの主専攻や副専攻として選択しやすい仕組みになっているのです。例えば、私の大学では、音楽副専攻のクラスの中に、音楽理論を中心としたものと、実技を中心としたものに分けられています。日本の音大生のような楽器の演奏実力に特段の自信があるわけではない私でも、実技によるオーディションがない、音楽理論中心の副専攻を選ぶことができ

るわけです。新たに副専攻を加える手続きもとても簡単で、学籍番号など基本的な学生の個人情報を入力したフォーム

を提出してから、オンラインで音楽の知識を問うテストを受けるだけで完了しました。ただし、授業の内容は思っていた以上に本格的で難しいものでした。四声以上の旋律を心地よいハーモニーを作りながら重ね合わせる、中世ヨーロッパの教会音楽から確立された対位法など、細かいルールを覚えることにはかなり手を焼きました。例えば、試験などでは、あらかじめソプラノの旋律が与えられているときには、それをもとに他のパートの音の組み合わせを考えていく必要があるのですが、どれか一つのルールに基づいて音を選んでみても、他のルールに違反してしまいうために、全てのルールも満たす旋律がなかなか思いつかず、苦戦した、という具合です。

一方で、私のようにこんな風にチャレンジしたけれども、合わなかったり、難しいという場合には、新しく副専攻を追加するときと同様、辞める手続きも簡潔になっています。オンラインで学籍番号や辞めたい副専攻を記載したフォームを提出するだけで、副専攻を外すことができます。思っていた以上に難解で、課題にも時間がかかってしまい、こ

れでは主専攻の勉強にも悪影響を及ぼすと考え、音楽理論の副専攻は取り下げることになりました。

このように短期間しか学ばないのに簡単に辞めることができてしまうのは、長期的なスキル習得に繋がらないデメリットはあるかもしれません。ただ、合わないと感じれば、すぐに他により自分が楽しめる分野に挑める利点もあります。主専攻や副専攻の変更が容易だからこそ、合わなかったときのリスクを最小限にでき、その時に興味を持った領域に気軽に挑戦できるのだと身をもって感じました。選択の機会を豊富にすることも、アメリカの大学らしい、自己責任を身に付ける場として与えられているのかもしれない。

■アメリカの大学Ⅱ寮生活

また、アメリカの大学生活の大きな特徴の一つは、寮で暮らす学生が多いことです。大学を舞台にしたドラマや映画などでも、寮生活の日常が描かれることも少なくないため、アメリカの大学といえは「寮生活」をイメージされる方も多いのではないのでしょうか。

現在、ボストン大学では約7割の

学生がキャンパスの敷地内にある寮で暮らしています。アメリカの大学の御多分に洩れず、私の大学でも寮は学生生活の基幹となっています。

そのため、どの寮を選ぶのかは、重要ポイントで、どこの寮の食堂はおいしいとか、多くの新入生が過ごす大型寮、元ホテルをリノベーションした寮や、寮生のテーマを設けた寮など、施設や設備、目的など多様なものがそろっています。

私が今住んでいる寮のフロアは、様々な言語を学ぶためのプログラムに参加した学生用に設けられたものになっています。私もそのプログラムに所属し、ネイティブスピーカーではありますが、日本語や日本文化を学習する学生向けチームに入っています。

例えば秋には、その日本語を学ぶチームで新嘗祭をテーマにしたイベントを催しました。アメリカの学生向けに少しアレンジしたもので、新嘗祭の歴史的背景をイベントの来訪者に説明したり、実際に日本で食べるものに質的には及ばないとはいえ、チームのメンバーとおにぎりやお茶漬けなどを作った経験は、日本文化を共有できた大切な思い出

になりました。

このプログラムの中には、異文化を学ぶ上での心構えや、コミュニケーションにおける自身の立ち位置を分析する少人数のセミナーのような授業があります。こちらについても、またの機会に触れたいと思います。

能登半島地震教訓ツアー

（能登半島地震被災地

レポート続編）

賛助会員 江上 美穂

借行11・12月号に掲載された能登半島被災地レポートの最後で触れた令和6年元旦に発災した地震の教訓を実際に被災地に訪れ自ら学ぶ事を目的としたツアーを同年10月19日、20日に開催しました。

能登里山空港にて集合し、自家用車で輪島市街地と郊外を見学、宿泊は江上邸。食事のみ実費で、他は全てボランティアとしました。また今回は受け入れ人数に制限を設けて実施させてもらいました。参加者は東京都内で活躍中のジャーナリスト、県庁職員、JICA職員の3名を厳選しました。